

宝彩有菜の

バガヴァッド・ギーター

第10回 「悟りの究極の目的とは」

text: 宝彩有菜

バガヴァッド・ギーター第13章は、「悟ると、宇宙と一体になれる。ブラフマンと一体化する。神と一体になる。クリシュナと一体になる」など、まあ、同じことですが、そのようなことが書かれています。

そして、一体になると、「自分の存在」が永遠であることが分かる。始りもなければ、終わりもない、生もなければ、死もない、それが分るといような内容です。それは、「悟り」の究極の目的かもしれません。

では、さっそく読んでいきましょう。

第13章の冒頭で、アルジュナが言います。

「クリシュナよ、私は肉体と魂について、田畑と、田畑の認識者について、また知識と知識の元について学びたいのです」(13-01)

田畑というのは、自然界のもろもろのことです。自然とか物質とか現象とかエネルギー等の意味です。今の言い方では、物理科学で把握できるすべてと言った方が良いでしょう。アルジュナの質問は、分かっているものと、その奥の分からないものについて知りたいということです。

クリシュナが答えます。

「アルジュナよ。この肉体が田畑であり、この肉体を知覚認識している者が田畑を知る者である」(13-02)

では、田畑を知る者とは、いったい何者なのでしょう。

肉体のことを知っているのは、精神ですから、知覚認識している者は、精神のことなのでしょう。が、しかし、

「アルジュナよ。そして、このわたしが全ての肉体の認識者であると知れ。肉体とその認識者についてこれが真の知識である」(13-03)

とクリシュナは言います。クリシュナが、認識者なのだそうです。

クリシュナの説明の要点は、こうです。

普通、私たちは、田畑の方に居ます。私たちは、私たちが「知る者」から見れば、「知られる者」です。逆に言えば、私たちは「知られる者」であって、「知る者」ではない。しかも、「知る者」を、見たことも聞いたこともない、全然知りません。知らない。

クリシュナは、「知る者」ですから、私たちを知っている。私たちは、「知られる者」ですから、クリシュナから知られていますが、私たちがクリシュナを知っているわけではない。

アルジュナは、そう言われて、怪訝な顔をしたのかどうか、知りませんが、クリシュナは、すぐに、次のように言い足します。

「この田畑は何なのか どのように構成され、変化し、また何処から来るか。田畑の認識者は誰で、どんなことをするか。それを今から簡単に説明する」(13-04)

と、今から続けて詳しく説明するということです。

そして、まず、クリシュナは、世の中は何でできているのかの説明を始めます。

それは、五大要素である、「地・水・火・風・空」でできているのだそうです。

今なら、「世の中は、分子と原子でできている」というようなものです。

これは科学や分析技術が発達してきただけで、ものごとの考え方が進歩しているわけではなさそうです。ですから、まあ、「地・水・火・風・空」でできているという「考え方」は、よしとしましょう。

そのつぎに、我念、理解力、未発の活力、十根（五官の受動両面）、心、五官の対象（明声香味触）、などで、できていると言います。感情や、思考も、田畑の範疇のようです。

これは意外です。でも、これから先の話の大切なポイントです。肉体は、田畑の範疇であると分かりますが、精神、つまり、マインドも田畑であり、マインドが考えたり、気分を起こしたりしているその気分すらも、それも田畑であるという分けかたです。私たちが普通、自分だと思っているものは、全部、田畑であるということです。田畑から一歩も出ていない。

なるほど、そうすると、先程の、田畑を「知る者」は、クリシュナ（神）であるという話に合います。矛盾しません。

ここまで、説明しておいて、クリシュナは、今度は、悟るとは何かを話し始めます。

「永遠の生命を得るために知るべきことを、これから説明しよう。ブラフマン（以下”神”）は無始であり有と無を超越している」(13-13)

永遠の生命を得るとは、すなわち、悟ることです。その説明を今からすると言っています。そして、神は、始めもなければ、終わりもない、有るも無いも超越していると言います。その神の説明が続きます。

「個々に分かれて存在するように見えるが、常に一つである。かれは万生万物を創造育成し、維持し、かつ、すべての絶滅者である」(13-17)

「魂と物質自然の相互作用を理解する者は、現在どのような環境にいても決して地上に再生しない」(13-24)

と言います。つまり、「田畑」と「田畑を知る者」の関係を理解したら、決して地上に再生しないと断言しています。つまり、悟れると言っているわけです。

このあたりの「悟り」の言い回しかたは、すでに、前述したとおりですが、復習しておく、「死なないのだから、生まれない」ということです。つまり、再生しないというのは、死なないということです。消滅しないということです。悟ると、「消滅することはありませんよ」と言うことですが、では、どうやったら、悟れるのかなあ、とアルジュナは、首をかしげています。

すると、クリシュナは、そのやり方を説明します。

「或る者は瞑想により、或る者は理論の修練により、或る者は行作の実修により我を見る」(13-25)

この他にも、神をひたすら信奉すれば、というのもあります。

瞑想以外の方法で悟れるようにも読めますが、元は、たぶん、次のようであったと思います。

「悟るには、『瞑想』をすることだ。それには、悟りについての理論や仕組みの理解など、『修行の知識』と、瞑想の実践や、日々の諸訓練などの『修行の実践』と、熱心にそれを継続、研鑽して行こうという『修

行の意欲』が、大切である」

と言ったのだらうと思います。

つまり、瞑想の修行をして悟るには、「知識」と、「実践」と、「意欲」が大切であると言っているわけです。

たしかに、知識が不足したり間違っていると、いくら実践しても、修行は進みません。また、知識が充分あっても、ちっとも実践しなければ、ちっとも修行は進みません。また、知識もあり、実践もそこそこしていても、その知識や実践の方法を信奉せず、疑いつつ行っていたのでは、決して先には進めません。

そして、さらに、クリシュナは、知る者と、知られる者のポイントを話して聞かせます。

「アルジュナよ、動くものも動かぬ者も、生まれ出たものはことごとく田畑とその認識者との結合であることを知れ」(13-27)

「そして、すべての生物のなかに等しく神が存在している。必滅の体のなかにあるこの不滅なるものを知る人は、存在の実相を見ている」(13-28)

つまり、すべての中に、認識者(神)が居るということです。ただし、ここで言う神は、バガヴァッド・ギター全般でそうですが、西洋的な「人格神」ではなくて、「ブラフマン」「宇宙」「至上者」という、どちらかという、人格の無い神です。

「あらゆる所に、あらゆる生物の中に、ひとしく神を見る者は、自分で自分を傷つけることなく、まっすぐに至高の目的地に赴く」(13-29)

そのように、すべてのものの中に、認識者、つまり、「神」ですが、それがあまねく、存在しているということが分かる人は、悟れると言っています。あるいは、悟るとそれが分かる。つまり、同じことです。

「すべての行為は物質自然によってつくられた肉体が行うのであって、本来の自分(アートマン)とは無関係であると知る者は存在の実相を見ている」(13-30)

さて、ここでアートマン(真我)が出てきました。「真我」は、物質自然とは別だということです。田畑ではないということです。

「自然、肉体の千差万別を見てすべて一つなるものより発することを知ったとき、その人はブラフマン意識(神の意識)に達する」(13-31)

要するに、「世の中は、『知る者』の側では、すべて一つにつながっている」と分かったら、その時、その人は、「田畑」から、「田畑を認識する者」の側になっているということです。「知られる者」から「知る者」に移行したということです。あるいは、アートマンはブラフマンの一部、あるいは、一体であると分かったら、そして、自分は、アートマンだと分かったら、それは悟りだと言うわけです。

「智慧の眼を開いて肉体とその認識者との相違を知る者は、物質自然の鎖から脱出する方法も知って至上の目的地に到達する」(13-35)

言いかえると、「しっかり、観察して、肉体(精神を含む)は、アートマン(真我)とは異なると理解できたら、物質世界から逃れる」ということです。そうですね。つまり、一言で言えば、悟れるということになります。